

北東北地方の女子高等学校の 大学・短期大学進学先マッピングと 県外進学需要の分析による 女子短期大学入学者増加策の検討

堀岡 勝

A Study on Increasing Enrollment at Women's Junior Colleges
Through Mapping Universities and Junior Colleges That Serve
as Destinations for Girls' High Schools in the North Tohoku Region
and Analysis of Demand for Out-of-Prefecture Higher Education

Masaru HORIOKA

The purpose of this research is a basic survey to increase enrollment at the junior college to which the author belongs. First, we examined the situation at Japan's women's universities and junior colleges, and confirmed that marketing and branding are important in securing enrollment numbers. Focusing on the low rate of women in the Tohoku region going on to university, we assumed that there was latent demand for higher education. They then mapped the destinations of four girls' high schools in the three prefectures of Tohoku and found that approximately 46% of girls went on to universities and junior colleges outside the Tohoku region. The study showed that by strengthening public relations activities in the Tohoku region, it is possible to expect an increase in the number of students enrolling.

キーワード：Women's University 女子大学, Junior College 短期大学,
Girls' High School 女子高等学校, Demand for Higher Education 進学需要

I. はじめに

近年、女子高校生の進学先として共学志向が強まり、女子大学（以下、女子大）離れが進んでいる¹⁾。その理由として、「女性の進路選択の広がりや働き方の変化に、教育内容が追いついていないことが大きな要因だ」との指摘がある²⁾。短期大学（以下、短大）離れはさらに深刻であり、女子短大においては二重の困難に直

面していると言える。そのような状況を打開するために、女子大や短大も様々な対策を講じている。たとえば、新たな学部や学科を設置することによって入学者数の増加を図る大学は多い。また、「女子大」の看板を下ろし、共学化へ移行することで入学者数の確保を試みる大学や短大も見られる。一方で、閉校を選択した、あるいは計画している大学や短大も年々増加している。筆者が所属する共立女子短期大学において

も、2021年度以降、入学定員を下回る傾向が続いており、依然として予断を許さない状況である。入学者の確保に向けて、学内の各部署が様々な改善策を検討・実施しているものの、解決には至っていない。

そこで本稿では、本学の入学者増加を目的とした調査と分析を行い報告する。第2節では、女子大、短大が置かれている現況について概観し、第3節では日本の高校生の大学進学率の動向と東北地方の大学進学率の比較を行う。第4節では、本学への進学が期待される東北地方、特に青森県、岩手県、秋田県の北東北地方3県に所在する女子高等学校の進学先について調査し地図上にマッピングすることで、女子高校生の東北圏外への進学傾向の視覚化を試みる。第5節では本学の強みと入学者増加策について考察し、第6節はまとめと今後の展望について述べる。

Ⅱ. 女子大学・短期大学が置かれている状況について

2023年春、恵泉女学園大学（東京都）や神戸海星女子学院大学（兵庫県）が2024以降の募集停止を相次いで発表した^{3, 4)}。その後も学部を廃止したり、共学化を発表する大学が後を絶たない。短大においては、上智大学短期大学部や武庫川女子大学短期大学部など23校が2025年に、創価女子短期大学など6校が2026年に募集停止することを公表している⁵⁾。1980年代「青短」「赤短」「白短」「明短」と呼ばれ、女子大生ブームの花形として人気のあった青山学院女子短期大学、山脇学園短期大学、学習院女子短期大学、明治大学短期大学の他、立教女学院短期大学などは既に歴史に幕を下ろしている⁶⁻¹⁰⁾。

閉校の理由に多少の違いはあるだろうが、例えば、神戸海星女子学院大学のウェブサイトには、その理由として「18歳人口の減少、特に近年の女子の実学志向、共学志向や大規模校志向など社会情勢の大きな変化の中で、入学定員確保に苦慮」「今後、継続した定員充足は極めて

困難であると判断」と記載されている⁴⁾。閉校する多くの女子大、短大でも、ほとんどが同様の理由であると推量される。

しかし、入学者数確保が厳しい時代を迎えているにも関わらず、入学定員充足率を満たしている女子大、短大も存在する。短大を例に挙げれば、戸板女子短期大学（東京都）や女子美術大学短期大学部（東京都）、近畿大学短期大学部（大阪府）、中村学園大学短期大学部（福岡県）、大分県立芸術文化短期大学（大分県）は、2024年度充足率100%以上を確保できている¹¹⁾。各短大の所在地や設置されている専攻分野が異なるため、その達成要因を一概に比較することは難しいが、例えば戸板女子短期大学の場合は、「企業で当たり前に行っているマーケティングやブランディング手法を取り入れ、高校生に選ばれる大学作りを学校一丸となって行」った結果、10年連続で定員の充足を達成できたとのことであった¹²⁾。このような成功事例は、手段や方法を工夫することで入学者数の維持が可能であることを示している。

Ⅲ. 大学・短大進学率の推移

文部科学省の統計¹³⁾によれば、大学・短大を合わせた進学率は延びている。1950年代から現在に至るまで、多少の浮き沈みはあるものの、全体としては上昇傾向が続いている。短大の進学率のみに限れば、ピーク時の4分の1近くまで減少している。2010年～2020年（平成22年～令和2年）までの18歳人口はほぼ横ばいであるが、大学進学率が増加しているため、大学入学者数は若干だが増えている。短大入学者数は、短大進学率の減少に合わせて徐々に減ってきている。

2023年度の大学（学部）・短大（本科）現役進学率（以下、大学等進学率）は、文部科学省「令和5年度学校基本調査」¹⁴⁾によれば、全国平均で60.9%である。男女別では、男子59.5%に対して女子62.1%と女子の方が高く、この傾向は1975年以降続いている。しかし、浪人生を

表1 18歳人口と高等教育機関への進学率等の推移¹³⁾[illegible]

男女別の4年制大学進学率 (2023年度)

時町哲哉・宮崎公立大准教授の分析をもとに作製

女子
の進学率が
より高い

女子の進学率が
男子を上回る

男子
の進学率が
より高い

男子の大学進学率 (%)	女子の大学進学率 (%)	都道府県
78	78	東京
75	68	京都
78	60	山梨
65	58	奈良
63	57	大阪
62	56	兵庫
61	55	神奈川
60	54	茨城
59	53	千葉
58	52	埼玉
57	51	福岡
56	50	香川
55	49	愛知
54	48	石川
53	47	徳島
52	46	高知
51	45	福岡
50	44	富山
49	43	長野
48	42	新潟
47	41	鳥取
46	40	青森
45	39	山形
44	38	山口
43	37	岩手
42	36	秋田
41	35	宮崎
40	34	大分
39	33	福岡
38	32	鹿児島
37	31	鹿儿島
36	30	熊本
35	29	山梨
34	28	山形
33	27	岩手
32	26	秋田
31	25	宮崎
30	24	大分
29	23	福岡
28	22	鹿児島
27	21	鹿儿島
26	20	熊本
25	19	山梨
24	18	山形
23	17	岩手
22	16	秋田
21	15	宮崎
20	14	大分
19	13	福岡
18	12	鹿児島
17	11	鹿儿島
16	10	熊本
15	9	山梨
14	8	山形
13	7	岩手
12	6	秋田
11	5	宮崎
10	4	大分
9	3	福岡
8	2	鹿児島
7	1	鹿儿島
6	0	熊本
5	-1	山梨
4	-2	山形
3	-3	岩手
2	-4	秋田
1	-5	宮崎
0	-6	大分
-1	-7	福岡
-2	-8	鹿児島
-3	-9	鹿儿島
-4	-10	熊本
-5	-11	山梨
-6	-12	山形
-7	-13	岩手
-8	-14	秋田
-9	-15	宮崎
-10	-16	大分
-11	-17	福岡
-12	-18	鹿児島
-13	-19	鹿儿島
-14	-20	熊本
-15	-21	山梨
-16	-22	山形
-17	-23	岩手
-18	-24	秋田
-19	-25	宮崎
-20	-26	大分
-21	-27	福岡
-22	-28	鹿児島
-23	-29	鹿儿島
-24	-30	熊本
-25	-31	山梨
-26	-32	山形
-27	-33	岩手
-28	-34	秋田
-29	-35	宮崎
-30	-36	大分
-31	-37	福岡
-32	-38	鹿児島
-33	-39	鹿儿島
-34	-40	熊本
-35	-41	山梨
-36	-42	山形
-37	-43	岩手
-38	-44	秋田
-39	-45	宮崎
-40	-46	大分
-41	-47	福岡
-42	-48	鹿児島
-43	-49	鹿儿島
-44	-50	熊本
-45	-51	山梨
-46	-52	山形
-47	-53	岩手
-48	-54	秋田
-49	-55	宮崎
-50	-56	大分
-51	-57	福岡
-52	-58	鹿児島
-53	-59	鹿儿島
-54	-60	熊本
-55	-61	山梨
-56	-62	山形
-57	-63	岩手
-58	-64	秋田
-59	-65	宮崎
-60	-66	大分
-61	-67	福岡
-62	-68	鹿児島
-63	-69	鹿儿島
-64	-70	熊本
-65	-71	山梨
-66	-72	山形
-67	-73	岩手
-68	-74	秋田
-69	-75	宮崎
-70	-76	大分
-71	-77	福岡
-72	-78	鹿児島
-73	-79	鹿儿島
-74	-80	熊本
-75	-81	山梨
-76	-82	山形
-77	-83	岩手
-78	-84	秋田
-79	-85	宮崎
-80	-86	大分
-81	-87	福岡

に比して低い結果となっている。その差分は短大進学率であり、男子0.9%、女子6.1%となっている。短大には女子別学の学校が多く、女子に人気の学部が充実しているためであると推察できる。

日本において、大学進学率の地域格差や男女格差があることは知られている。表2から、男女共に進学率の低い都道府県が東北地方と九州地方に偏っていることがわかる。東京都の大学進学率が80%近くあるのに対し、東北地方と九州地方のほとんどの県が40%前後となっている。通学圏内の大学・短大数の違いや、所得地域間格差などの影響もあろうが、この差分の高校生にアプローチができれば、入学者数を増やせる可能性がある。

本学には東北地方から毎年若干名入学者がいることから、ここでは対象を東北地方の県に絞り、「令和5年度学校基本調査」のデータを元に大学等進学率について比較を行った（表3）。

— 19 —

表3 東北地方6県の大学等男女別進学率比較

	全体	男子	女子
青森県	53.5% (32)	51.1% (32)	56.0% (29)
岩手県	47.6% (43)	44.7% (43)	50.5% (45)
秋田県	47.5% (44)	45.1% (41)	50.2% (46)
山形県	48.8% (39)	46.3% (38)	51.5% (43)
宮城県	55.5% (28)	55.3% (24)	55.6% (31)
福島県	50.1% (36)	47.5% (37)	52.9% (36)
全国平均	60.9%	59.5%	62.1%

(括弧内の数字は国内順位を表わす)

る。北東北3県(青森県、岩手県、秋田県)の中では、青森県が比較的進学率が高く、全体で32位である。岩手県は43位、秋田県は44位とかなり下位に位置している。女子に限っては、岩手県45位、秋田県46位であり、さらに男子の順位よりも下がっている。宮城県を含めても、全ての県において順位が全国平均以下であり、大学等に進学する高校生が少ないことがわかる。

Ⅳ. 北東北3県の女子高等学校の進学先比較

前節で取り上げた北東北3県の女子高校生の進学先について調査を行うこととした。各県の高等学校のウェブサイトから最新の進学実績を調べたところ、男女別のデータを得ることが難しかったため、調査対象を女子高等学校に絞った。青森県にある女子高等学校は、千葉学園高等学校(八戸市)の1校のみであった。岩手県は、岩手女子高等学校(盛岡市)、盛岡白百合学園中学高等学校の2校であった。秋田県は、聖霊女子短期大学付属高等学校(秋田市)の1校であった。いずれの県も、近年に複数の女子高等学校が閉校や合併、共学化している状況であった。調査対象としている盛岡白百合学園中学高等学校も、2026年から共学化されることが発表されている¹⁶⁾。

1. 千葉学園高等学校¹⁷⁾

(青森県八戸市)

ウェブサイトに掲載されている進学先データは、2019年～2021年度の3年分をまとめたものが最新であった。合格者数表記はなく、進学先の四年制大学名、短期大学名、専門学校名だけであるため、単年度の合格者実数は不明である。Q&Aには、「2022年3月の卒業生の進路の内訳は、大学・短期大学が10%、専門学校が33%、本校看護専攻科が28%、就職が19%、その他が10%」の記載があり、募集定員1学年170名として計算すると、毎年17名前後が大学・短大に進学すると考えられる。

2. 岩手女子高等学校¹⁸⁾

(岩手県盛岡市)

ウェブサイトに掲載されている進学先データは、2023年度が最新であった。四年制大学8名、短期大学4名、専門学校20名、就職先56名であり、大学・短大進学率は14%程度である。

3. 盛岡白百合学園中学高等学校¹⁹⁾

(岩手県盛岡市)

ウェブサイトに掲載されている進学先データは、2023年度が最新であった。四年制大学107名、短期大学3名、専門学校7名であり、就職その他がいないと仮定すれば、大学・短大進学率は94%程度である。

4. 聖霊女子短期大学付属高等学校²⁰⁾

(秋田県秋田市)

ウェブサイトに掲載されている進学先データは、2023年度が最新であった。四年制大学74名、短期大学22名、専門学校25名、就職先5名、その他6名であり、大学・短大進学率は73%程度である。

調査対象4校の大学・短大進学率を比較すると、進路指導の方針が異なっていることが予想される。しかし、今回はその点は考慮せず、抽

出した各校の大学・短大進学先データを地図上にプロットし、傾向の視覚化を行った。

図1は千葉学園高等学校の進学先プロット図である。サンプル数は15名であるが、過去3年分がまとまっているデータであったため、実際にはもう少し少ないと考えられる。同県内への進学は大学2名、短大3名となっている。東北圏内では、岩手県、秋田県の短大に各1名、宮城県の短大に2名である。それ以外の地域では、北海道の大学に3名、東京都の大学に1名、短大に1名、千葉県の大学に1名となっている。正確なデータとは言えないが、東北圏外への進学率は40%であった。

図2は岩手女子高等学校の進学先プロット図である。サンプル数は12名である。同県内への進学は大学2名、短大2名、東北圏内では宮城県の大学に4名である。その他、栃木県と神奈川県の大学に各1名、東京都の2つの短大に各1名進学している。うち1名は本学の学生である。東北圏外への進学率は33%であった。

図3は盛岡白百合学園中学高等学校の進学先プロット図である。サンプル数は110名あり、特に大学への進学率が高い高校である。同県内への進学は大学28名、短大1名である。東北圏内では、青森県の大学に2名、秋田県の大学に2名、宮城県の大学に17名、福島県の短大に1名が進学している。北海道の大学に1名、関東圏の大学に47名、短大に1名であり、残り10名は愛知県や関西地方の大学などへ進学している。東北圏外への進学率は54%であった。

図4は聖霊女子短期大学附属高等学校の進学先プロット図である。サンプル数は96名である。同県内への進学は大学19名、短大18名である。東北圏内では青森県の大学に2名、短大に1名、岩手県の大学に2名、宮城県の大学に12名、短大に2名、山形県の大学に1名、短大に1名である。北海道の大学に1名、関東圏の大学には31名、残りは新潟県、京都府の大学へ進学している。東北圏外への進学率は40%であった。

上記の北東北3県内にある4つの女子高等学

校に限ってではあるが、進学を望む場合は県内志望よりも、県外志望の割合が高いと言える。県外では同じ東北地方内の大学や短大に進学する場合もあるが、4校を平均すると約46%の女子高校生が東北圏以外の大学・短大に進学していることが明らかとなった。

V. 本学の強みと入学者増加のための対策

これら4校の女子高等学校の進学先調査から、東北地方の女子高校生は、他県に進学している割合が高いことがわかった。その場合、自宅から通学ができないため、大学や短大周辺で一人暮らしや寮生活を選択することが考えられる。一人暮らしが条件の場合、東北地方の県であっても、関東圏の都県であっても、家賃以外にそれほど大きな違いはないと言える。ただし、初めて親元を離れて生活する学生や送り出す側の家族にとっては、心理的な安心も求められる。そのため、出来るだけ地元に近い距離での進学を希望する場合も多いことが考えられる。

本学の最大の強みは立地である。大学案内にも立地の良さがアピールされている。東京駅から一番近い大学（サテライト校は除く）であることが地図付きで示されている。新幹線沿線の学生にとっては帰省しやすく、また、家族の方々も容易に様子を見に来ることができるメリットがある。東北圏の大学・短大に物理距離では及ばないが、時間距離では優っている可能性は高い。

通学に関しても、本校舎は都営地下鉄三田線神保町駅から徒歩1分であり、雨天時に傘を忘れてもほぼ濡れず通学できる。地下鉄半蔵門線や東西線の利用も可能であり、首都圏のどの地域からでもアクセスしやすい。また、共立女子大学・短期大学専用の学生寮がある点も、アピールポイントとなる。学生にとって、入学前から相談できる仲間ができることは心理的な安心感につながる。さらに、食事付きで寮父母が住み込みという点は、緊急時や防犯面で安心できる要素となり、学生本人だけでなく家族にとっ

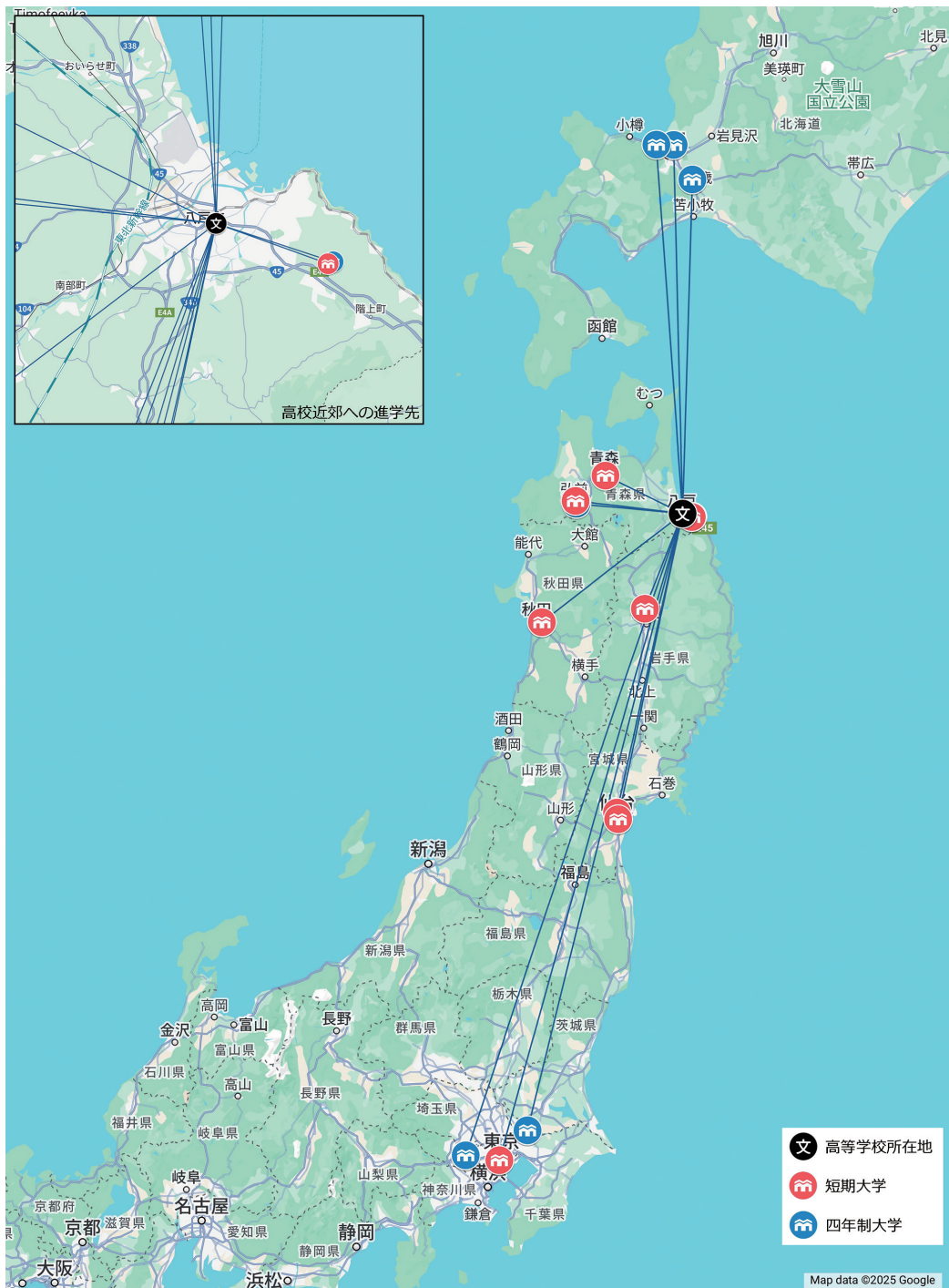


図1 千葉学園高等学校（青森県八戸市）の大学・短大進学先プロット図

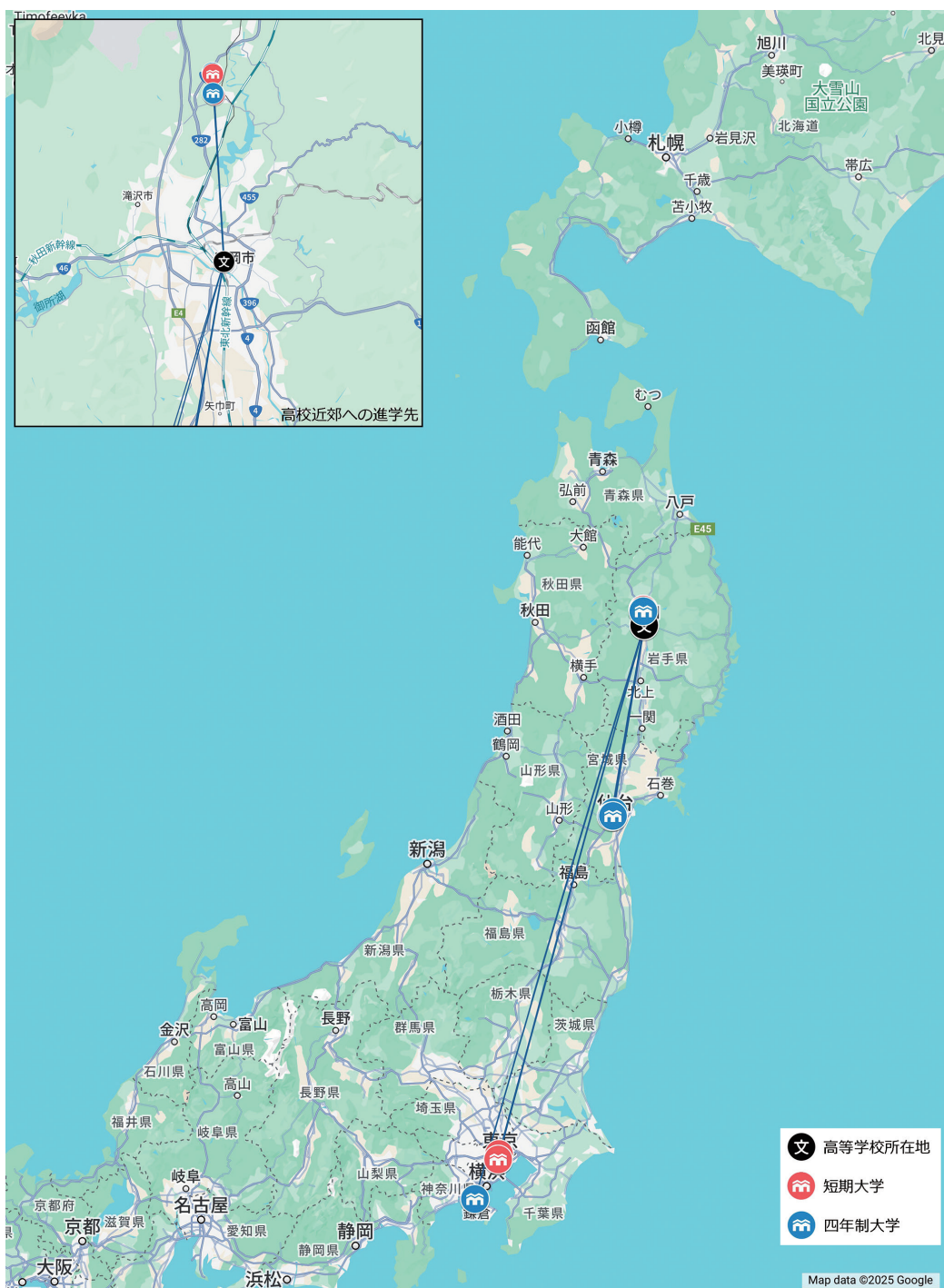


図2 岩手女子高等学校（岩手県盛岡市）の大学・短大進学先プロット図

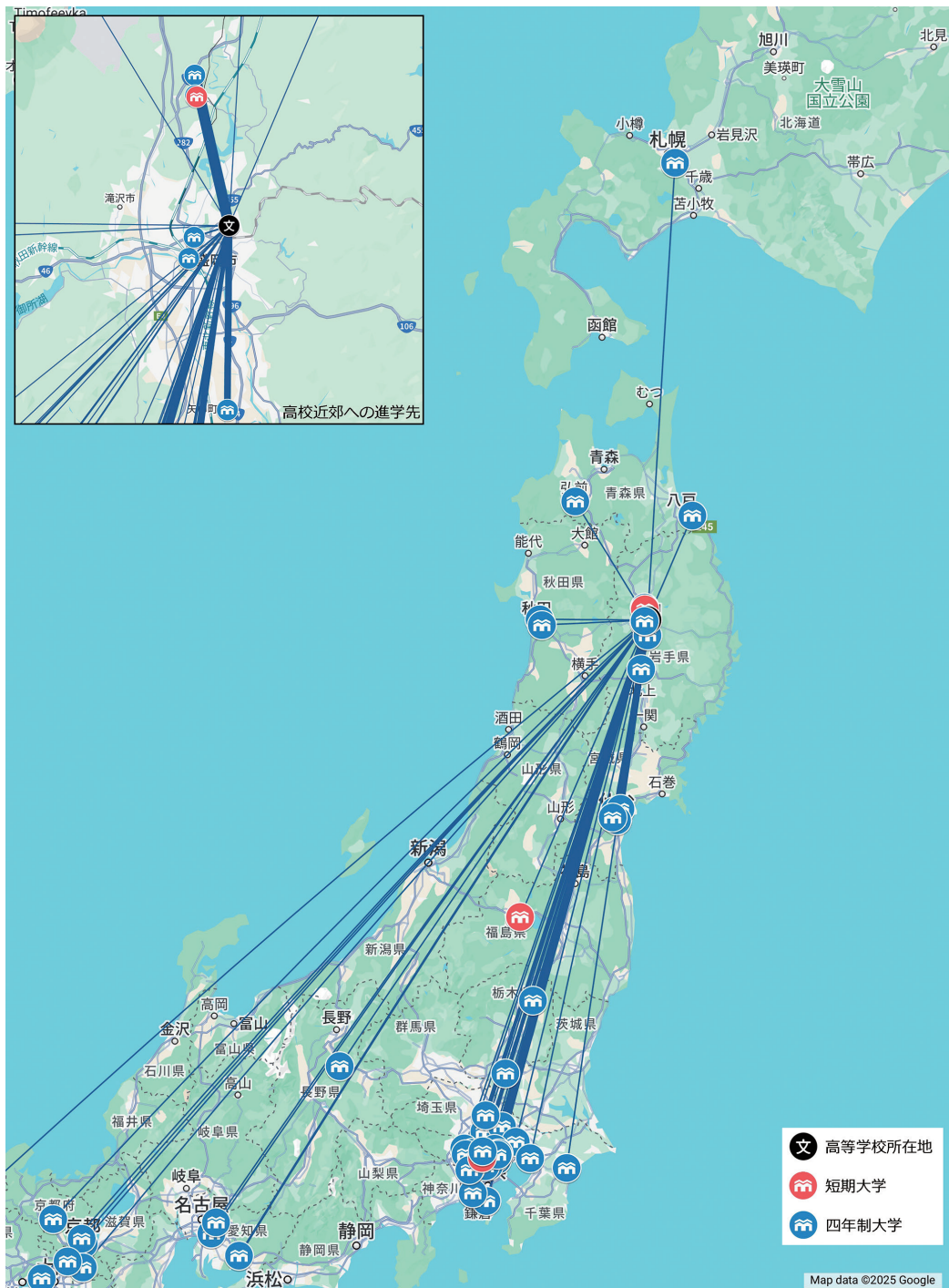


図3 盛岡白百合学園中学高等学校（岩手県盛岡市）の大学・短大進学先プロット図

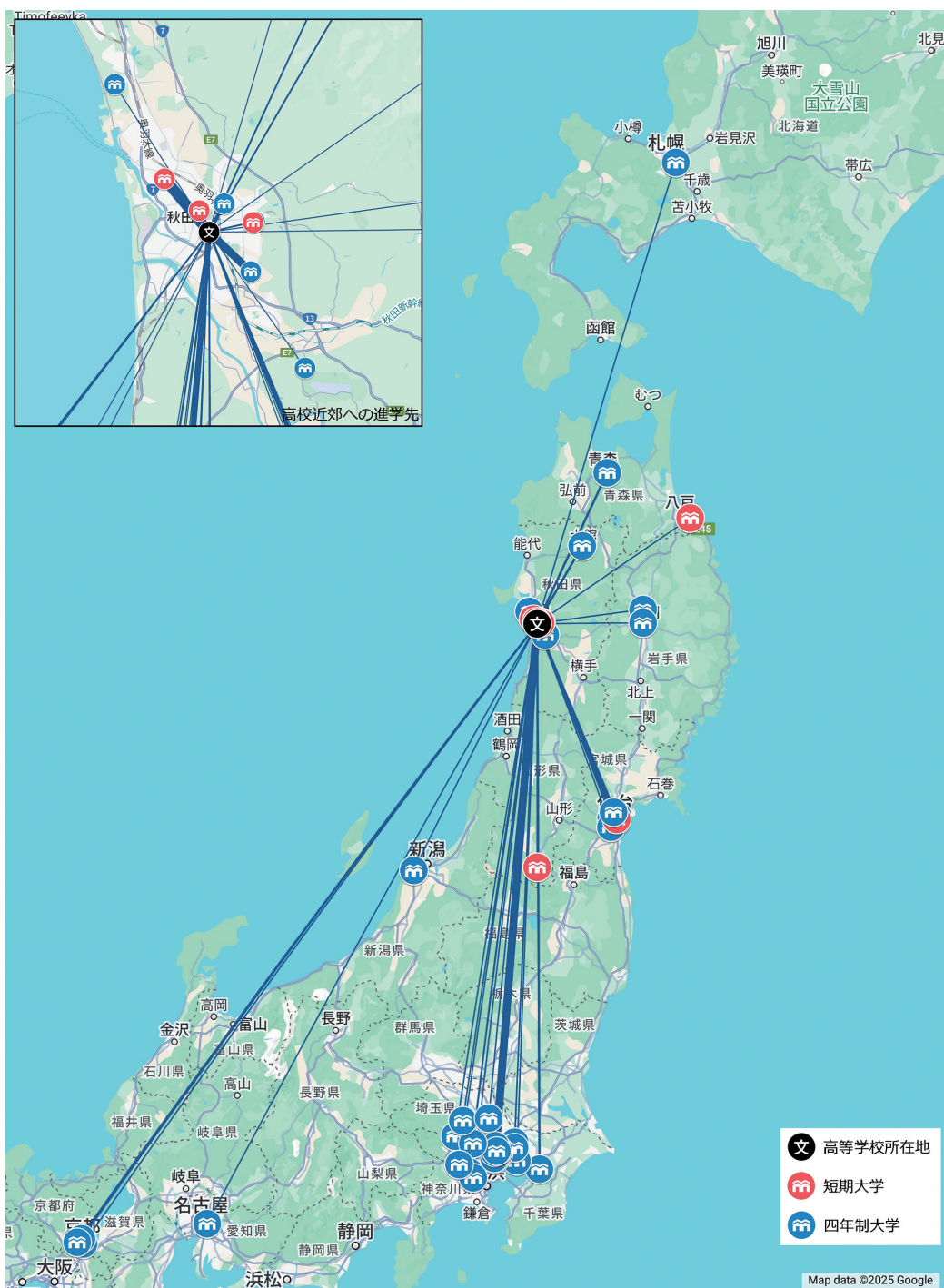


図4 聖霊女子短期大学付属高等学校（秋田県秋田市）の大学・短大進学先プロット図

ても心強い。

これらの立地を生かしたマーケティングやブランディングが、本学の入学者の確保に重要であると筆者は捉えている。本学における研究・教育内容の充実や学生の各種支援体制の強化は大切であり継続して行っていくのは当然であるが、地方の学生や家族にとっては、親元を離れて生活できる安心感の提供が必要となってくる。本学に在学する岩手県出身の学生によれば、「同級生の友達も東京の大学に進学したかったが、東京は恐いところだからと親に言われたため諦めた」とのことだった。また、「出身高校の大学情報コーナーには、東北圏の大学や短大の案内ばかりで、関東圏の大学案内はほぼなかった」とも語っていた。関東圏の大学・短大の広報活動が東北地方で十分に行われていない実態が示唆される。

実際、本学は東北圏に対してほとんど指定校枠を設けていない。しかし、秋田県の聖霊女子短期大学付属高等学校では、2023年度に上智大学5名、聖心女子大学7名が合格しており、過去3年間合計で、それぞれ12名、18名の合格者を出している。これは他の関東圏の大学合格者数に比べて圧倒的に多い。この高校のウェブサイトからの情報では、聖心女子大学はこの高校の指定校となっていた。上智大学の指定校枠については記載がなかった。多くの入学者を受け入れている他大学・短大に倣い、本学も出願条件を満たしている高校に対して積極的に指定校推薦について働きかけるべきである。

VI. まとめ

本稿では、女子大学・短期大学が置かれて状況を整理し、本学の入学者数の確保には、マーケティングやブランディングが重要であることを確認した。また、東北地方の女子の大学等進学率の低さから潜在的な進学需要があると推測し、北東北3県内の女子高等学校4校の進学先のマッピングを行い、その傾向を調査した。その結果、この4校の平均からは約46%の女子高

校生が東北圏以外の大学・短大に進学していることがわかった。しかし、本学は東北圏への広報活動をあまり積極的に行ってこなかったため、他大学・短大に比べて東北圏からの進学需要に対して応えられていないことが明らかとなった。

女子高校生の共学志向や四年制大学志向の高まりにより、女子大や短大離れが進んでいると言われているが、女子大や短大側も新規入学希望者の開拓に積極的に取り組んでこなかった点について反省すべき部分があるだろう。2040年には18歳人口が2024年の106万人から82万人にまで減少するとの推計²¹⁾があり、さらに多くの大学や短大が募集停止に追い込まれる可能性がある。こうした状況の中で、進学を希望する受験生に対しては、自校の専門性や学修内容、研究成果などの学びの内容に加え、それ以外の幅広い情報を提供することが重要となってくる。これまでとは異なる視点で大学運営や企画立案、広報活動を総合的に見直し、受験生にとって魅力的な学校としてのイメージを確立することが求められる。

※図1～4はGoogleMapのマイマップ機能を利用して作成

参考文献

- 1) “減る女子大 問われる役割”，朝日新聞，2023.7.24，朝刊，p1
- 2) “女子大離れ深刻”，読売新聞，2023.6.21，朝刊，p3
- 3) “恵泉女学園大学・大学院 学生募集停止のお知らせ”，2023.3.22，恵泉女学園大学ウェブサイト，
<https://www.keisen.ac.jp/other/post-1428.html>，（閲覧：2024.12.10）
- 4) “神戸海星女子学院大学 学生募集停止のお知らせ”，2023.4.17，神戸海星女子学院大学ウェブサイト，
<https://www.kaisei.ac.jp/college/news/>

- 2023/04/17/article156223, (閲覧：2024.12.10)
- 5) “2026年新設へ 大学8校申請”, 旺文社教育情報センター, 2024.11.14, 旺文社パスナビ for School,
https://passnavi-school.obunsha.co.jp/contents/02career_05eic_20241222-e/, (閲覧：2024.12.10)
 - 6) “青山学院女子短期大学の閉学について”, 青山学院女子短期大学ウェブサイト,
<https://www.aoyamagakuin.jp/luce/>, (閲覧：2024.12.10)
 - 7) “山脇学園短期大学卒業生の皆様へ”, 山脇学園中学校・高等学校ウェブサイト,
https://www.yamawaki.ed.jp/graduate/juniorcollege_graduate/, (閲覧：2024.12.10)
 - 8) “学習院女子大学の学習院大学への統合について”, 2023.7.27, 学習院女子大学ウェブサイト,
<https://news.gakushuin.ac.jp/export/?c=detail&token=16decf8c11145a26b5da9f007afc82c1>, (閲覧：2024.12.10)
 - 9) “女子同窓会のご案内(短期大学卒業の方)”, 明治大学ウェブサイト,
<https://www.meiji.ac.jp/meitan/angel.html>, (閲覧：2024.12.10)
 - 10) “立教女学院短期大学 閉学のご挨拶”, 2020.3.31, 立教女学院短期大学ウェブサイト,
<https://jc.rikkyojogakuin.ac.jp/info/20200331/>, (閲覧：2024.12.10)
 - 11) “短大の募集停止まとめ&短大から大学の学部への転換はどのように進んでいるのか? 短大募集停止データまとめ”, 2024.9.11, US進学総合研究所,
<https://www.universcape.co.jp/2024/09/11/usi-column-16/>, (閲覧：2024.12.10)
 - 12) “相次ぐ大学募集停止, 厳しい女子大や女子短期大学の時代, 小規模の女子短大になぜ高校生が集まるのか?”, 2023.9.14, 大学ジャーナルオンライン,
<https://univ-journal.jp/column/2023233873/>, (閲覧：2024.12.10)
 - 13) 18歳人口と高等教育機関への進学率等の推移, 文部科学省, 文部科学白書2023, p111
 - 14) 令和5年度学校基本調査/年次統計, 2023.12.20, 文部科学省
 - 15) “女性の進学 消えない壁”, 男女別の4年制大学進学率, 朝日新聞, 2024.5.5, 朝刊, p2
 - 16) “2026年度以降の男女共学化について”, 2024.7.22, 盛岡白百合学園中学高等学校ウェブサイト,
<https://msgsp.jp/ですと/>, (閲覧：2024.12.10)
 - 17) 進路情報, 千葉学園高等学校ウェブサイト,
<https://chibagakuen.ac.jp/career/>, (閲覧：2024.12.10)
 - 18) 令和5年度卒業生 進路状況, 岩手女子高等学校ウェブサイト,
<https://iwatejoshi-h.ed.jp/aftergrad/index.html>, (閲覧：2024.12.10)
 - 19) 過去5年間の実績, 盛岡白百合学園中学高等学校ウェブサイト,
<https://msgsp.jp/track-record/>, (閲覧：2024.12.10)
 - 20) 進路実績, 聖霊女子短期大学附属高等学校ウェブサイト,
<https://www.akita-seirei.ac.jp/highschool/career/course/>, (閲覧：2024.12.10)
 - 21) 人口の推移と将来推計, 中央教育審議会大学分科会(第175回)会議資料
【参考資料1】 参考データ, 2023.10.25, p2